

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲	第	号
------	-----	---	---

氏 名 都 島 由 希 子

論 文 題 目

Prognostic significance of changes in serum thyroglobulin antibody levels of pre- and post-total thyroidectomy in thyroglobulin antibody-positive papillary thyroid carcinoma patients

(抗サイログロブリン抗体陽性甲状腺乳頭癌全摘後症例において、術前術後の抗サイログロブリン抗体価の変化は予後予測因子となり得るか?)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委 員

大石 二九



名古屋大学教授

委 員

安藤 雄一



名古屋大学教授

委 員

横井 香平



名古屋大学教授

指導教授

小寺 泰弘



論文審査の結果の要旨





今回我々は、血中 TgAb 陽性甲状腺乳頭癌全摘後症例において、血中 TgAb 価の術前術後の変化と予後の関連性について検討した。術後 1-2 年の間に血中 TgAb 価が術前値の 50% 未満に低下しなかった症例は、術前値の 50% 未満に低下した症例に比べ予後が不良であった。多変量解析において、血中 TgAb 価が低下しにくいことは独立した予後不良因子であった。血中 TgAb 価の術前術後変化は動的予後因子であることが示唆された。本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 術後 1-2 年という幅は、本研究が後ろ向き研究であるため設定した期間である。TgAb 価の術前術後変化という動的予後因子は、リスク判定に応じた治療、経過観察計画を立てるという意味で重要である。現在甲状腺乳頭癌では、根治的全摘後症例にアブレーション治療を行うことが、欧米では標準治療となっている。日本では、再発リスクの高い症例にアブレーション治療がされることが多い。経過観察においても、画像検査による定期的な全身検索が推奨されていない。この動的予後因子によるリスク判定は、アブレーション治療の介入や経過観察における検査のタイミングを考慮する判断材料となり得る。また、実際には TgAb の半減期は 10 ヶ月や 3 年と報告されており、ECLIA 法を用いて測定するようになった最近の症例では、半年で明らかに低下する症例も多くある。今後の検討課題として、半年から 1 年での変化を対象として有意差を示すことができると、アブレーション治療介入の必要性を判断する材料としてより有用であると考えられる。
2. TgAb の抗体価は免疫反応により得られるものであるため、同一個体における同一材料、同一手技で得られた抗体価でないと、比較対象にならない。よって、異なる二個体においては、ある一点での TgAb 抗体価の絶対値の比較検討はできない。異なる二個体においては、2 点における抗体価の変化率によって、比較が可能となる。今回は、転移の状況によって TgAb 抗体価が増加していくか否かまでの判定は今後の課題とし、術後の治療反応として術前術後変化に着目した。
3. Stage IV 症例のうち、約 25% が低下群、75% が非低下群に該当した。低下群の 90% が無再発、非低下群の 60% が無再発、原病死を来したのは非低下群のみであり、Stage IV でも低下群では予後が良好であることが示唆される。一方、Stage III 以下の症例のうち、約 80% が低下群、20% が非低下群であり、このうち再発症例は 2 例と少なく統計的検討が困難であった。本研究の平均経過観察期間は 5.8 年であり、さらなる経過観察により Stage III 以下の手術時低リスク群での有意差も出る可能性がある。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙2

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	都島由希子
試験担当者	主査 大石 綾子  安藤 雄一  横井 香平  指導教授 小寺 泰弘 			

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 術後1-2年という期間を要してわかる動的予後因子の意義は何か。
2. TgAbの絶対値での評価は可能か。
3. 手術時に得られる再発リスク因子で高リスクと判断されても、術後低リスクと評価される症例、また逆の症例はどのくらいあるのか。

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力並びに考察力を有するとともに、移植・内分泌外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。